

## アフリカの母子保健事情

森 久美子

看護学部 母性・小児看護学講座

ザンビア共和国は、アフリカ諸国のなかでも独立後大きな内戦もなく比較的政情が安定している国である。平成 25 年度から研究協力を得ている首都ルサカの A 病院は、都市部の人口が多い地域で、分娩件数が月 200 例の病院である。数年前に日本の支援で改築され、A・レベル 1 病院に昇格した。この改築の目的は、大学病院へのハイリスク妊産婦および新生児の搬送を軽減させることにあり、レベル 1 になったことで施設の備品が充実しただけでなく、それまでは健診、分娩、搬送の診断まですべて助産師が対応していたが、産科医師が常勤することとなった。1, 2 年に 1 回のペースで病院のおもに外来を訪れ、妊産婦および新生児の実情や助産師の役割を理解してきた。今回は、日本の母子保健と比較しながらアフリカの母子保健事情と、途上国の母子保健の課題をお伝えする。